

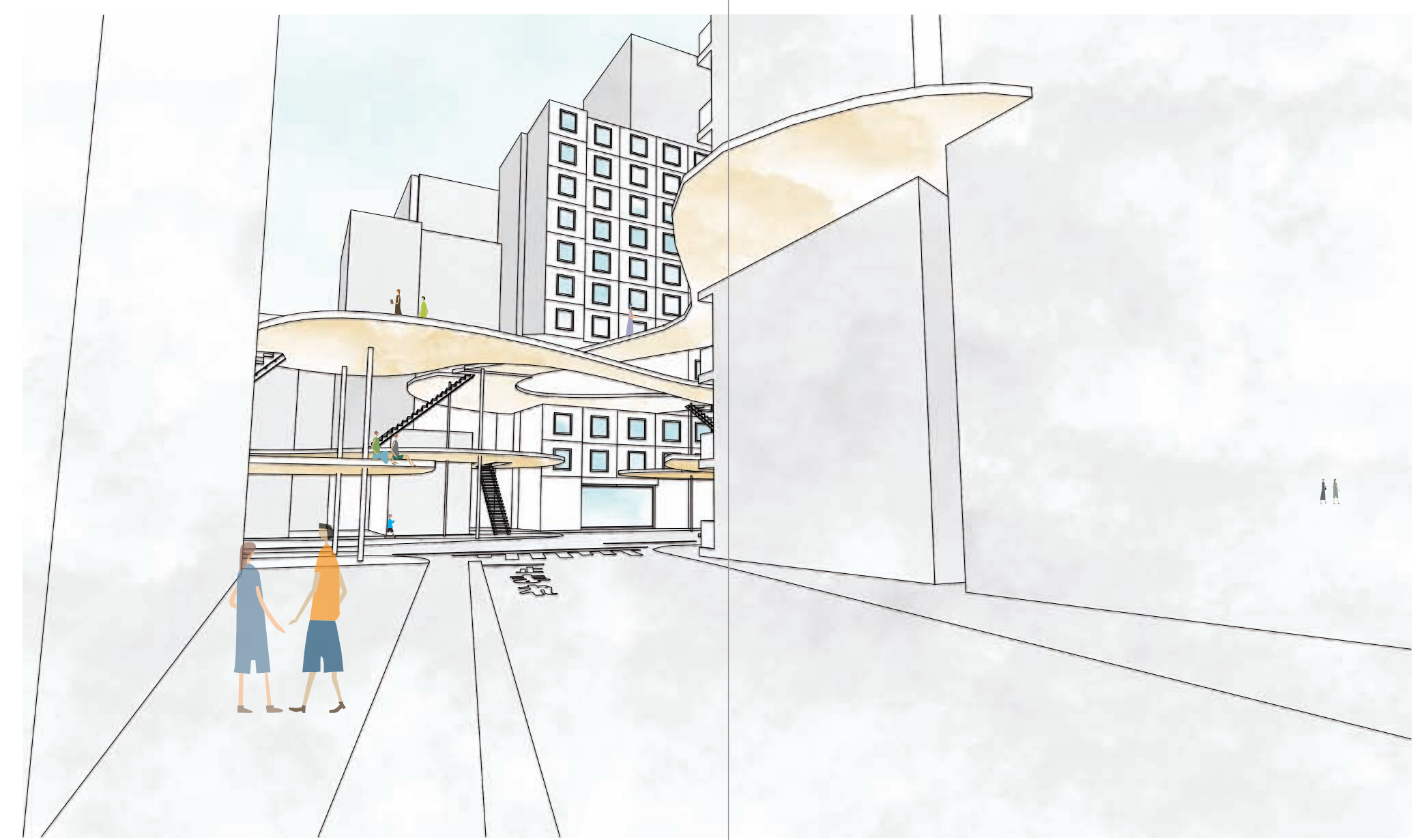
大井町駅から出てすぐにあるどんたく通り。駅前という立地条件ながら賑わいのない通り。

そこにいるのは忙しく歩き回る人たちがばかりで自分たちのまちを見ようとする人はいません。

もっと歩きたくなるようなまちだったら、自分たちのまちをもっとよく知れるかもしれない。自分のまちをもっと好きになれるかもしれない。

そんな思いから歩きたくなる。まちに寄り添う散歩みちを提案します。

寄り添う散歩みち  
-3つのスラブを用いた大井町ネットワーク-

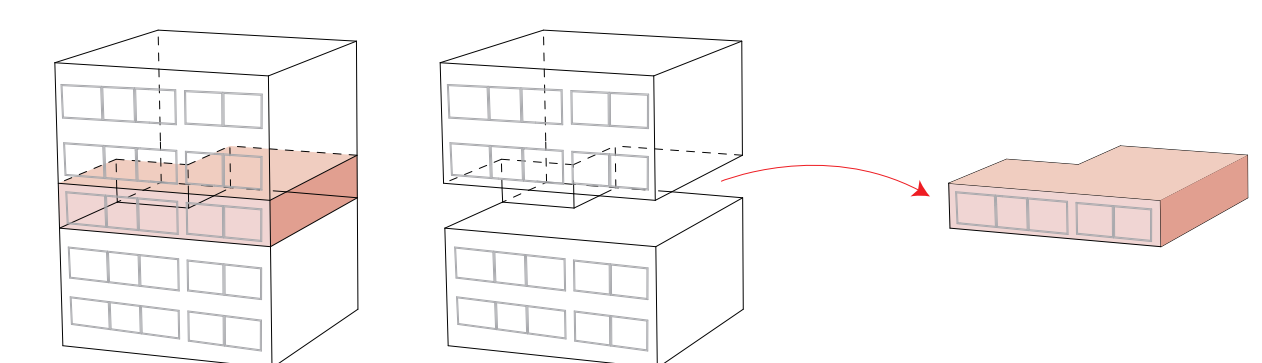


1. まちの濃度



まちは、濃度の高いところから低いところへと流れていく。高層ビルから空地、密集地から過疎地へ流れるきっかけをつくることで賑わいを生む。

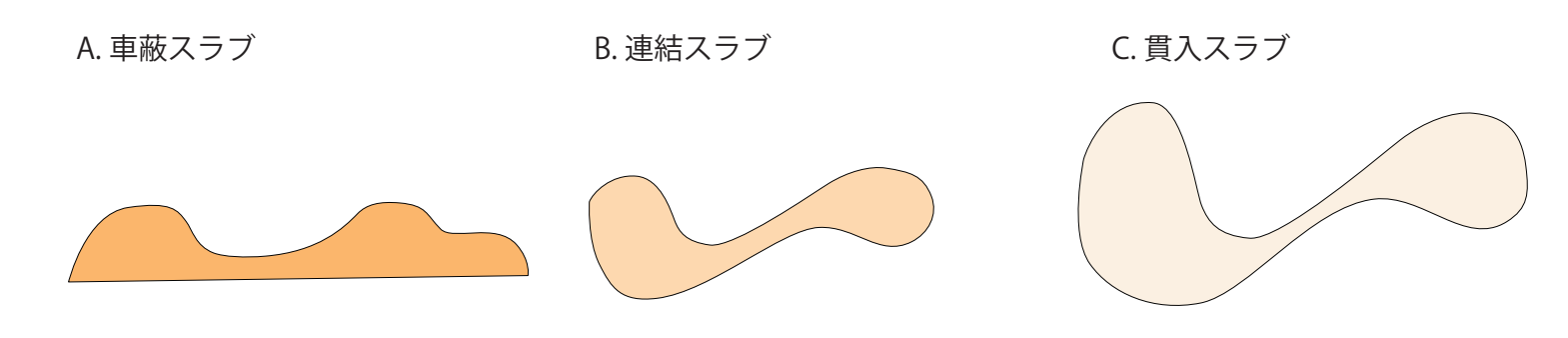
2. ビルを減築する



濃度の違いを生み出すために、利用率の低いビルの一部を減築し、外部とする。使われていなかった部分は誰もが立ち寄れる空地となり人を引き寄せる。



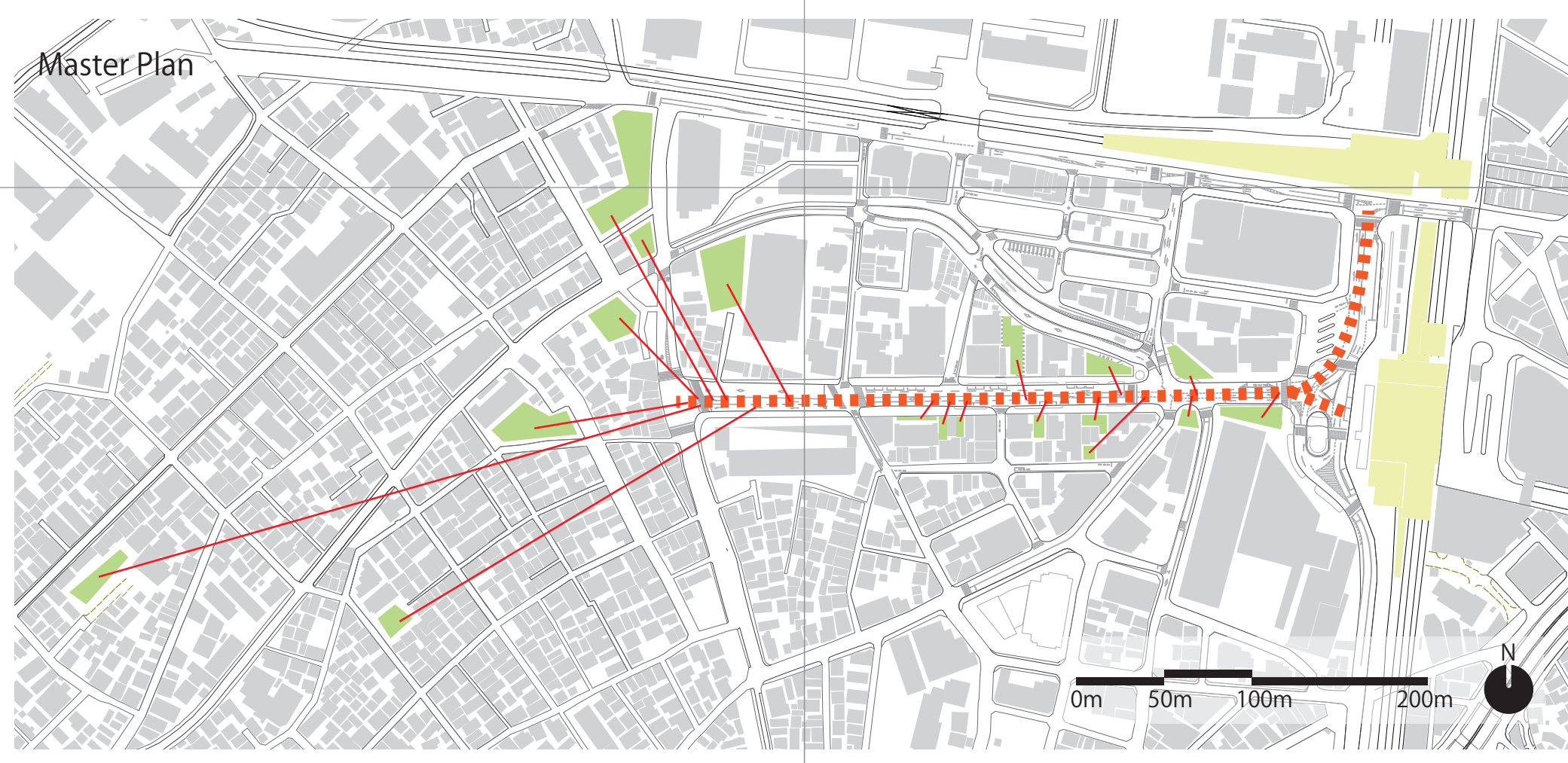
3. 大井町を変化させる3種のスラブ



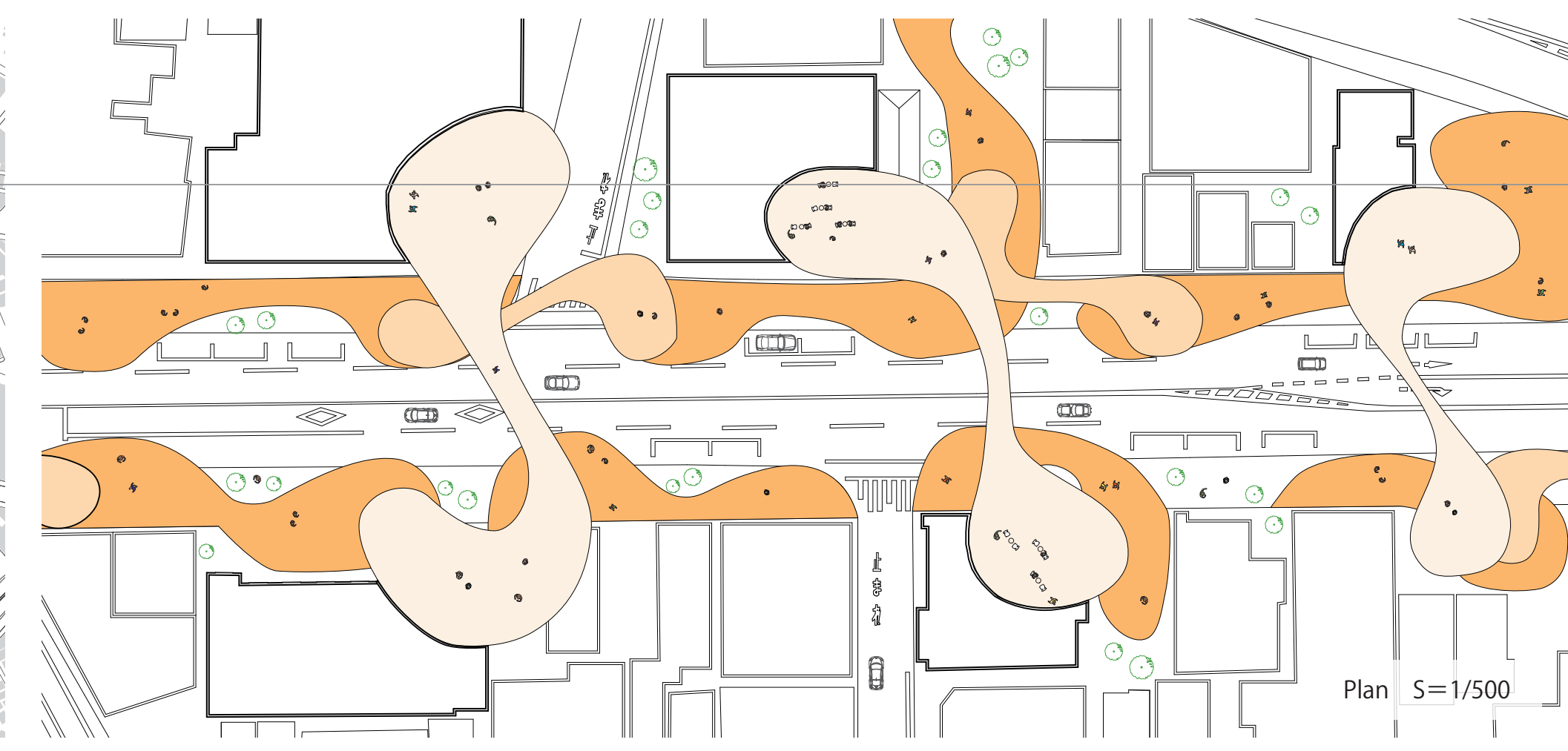
車蔽スラブは車道に飛び出すように配置される。車の進行を阻み歩行者が安全に移動できるようになる。

連結スラブは他の2つのスラブを緊く役割を持つ。地上に降りることなく空中回廊を歩くことが出来る。

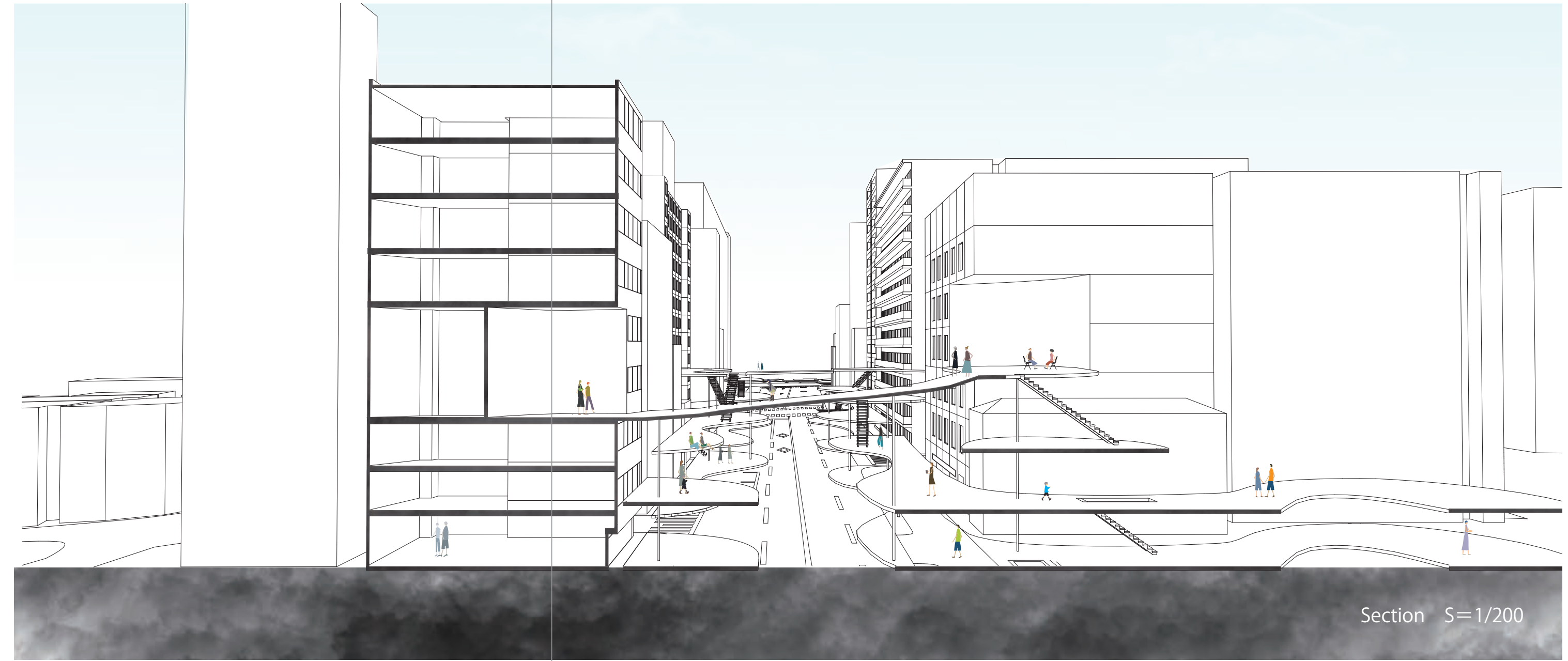
貫入スラブはビルに突き刺さるように配置される。ビル同士を繋ぎ、豊かなオープンスペースを生み出す。



■ 大井町駅  
■ 空き地、駐車場

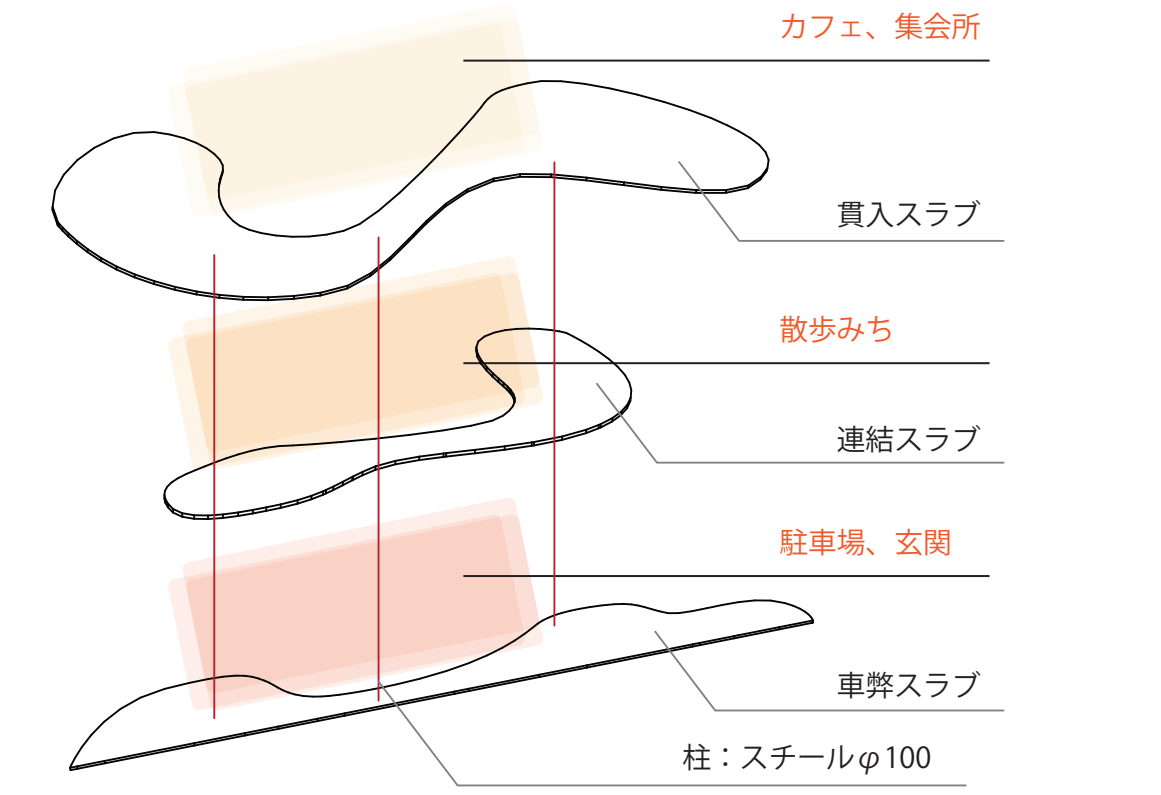


3種のスラブがまちに寄り添うように配置され賑わいを生む。また、スラブ間には緑が並び憩いの場を演出する。貫入したスラブ部分はオープンカフェやちょっとした集会場となり、住民や社員に使用される。災害時にはスラブは緊急避難道として用いられる。



Section S=1/200

スラブシステム図



車蔽スラブは通りに寄り添うようにあるため人々誘う玄関の役割をする。連結スラブは全体をつなげ、上へ上へと人を引き込む。そして貫入スラブによって滞るアクティビティが生まれ、賑わいを創出する。

3種のスラブはスチール製の柱によって支えられる。また、既存のビル同士を繋ぐことで耐久性をさらに増すことになる。そのため薄い板がまちの中に入り込んでいく印象を与える。



私が考えたのは大井町駅商店街に3種類のスラブを用いて散歩みちを作る提案です。

どんたく通りは、駅前という立地条件ながら賑わいがありません。  
その大きな理由として、中心に大通りがあり横断歩道が極端に少ないことから歩きづらく賑わいが出ないのだと感じました。

そこで、もっと歩きたくなるようなまちだったら、という思いから住民と会社員を主な対象とした散歩みちを考えました。

3種のスラブはそれぞれ異なる役割を持ち1つは駐車場の役割と玄関の役割をもつ車弊スラブ。  
もう一つはデッキとしてスラブ全体を繋ぐ連結スラブ。最後が既存のビルに突き刺さるようになる貫入スラブです。

この3種のスラブによってまちに濃度差を起こし回遊性のある賑わいの場を作り出します。  
災害時にはスラブが避難経路となります。また車輛止めの役割も担います。

このスラブによってまちなかネットワークを形成しまちに活気を生み出します。